



Title	ドイツ語から見たゲルマン語 (9) : 動詞の強変化と弱変化, ウムラウト, 人称語尾
Author(s)	清水, 誠; Shimizu, Makoto
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 168, 1(左)-35(左)
Issue Date	2022-12-09
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.168.l1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87486
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_168_Shimizu.pdf



ドイツ語から見たゲルマン語 (9)

— 動詞の強変化と弱変化, ウムラウト, 人称語尾 —

清水 誠

German as a Germanic Language (9)

— Strong vs. Weak Verbs, Mutation and Personal Endings —

(*Bulletin of the Faculty of Humanities and Human Sciences* No. 168.

Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University.

Sapporo/Japan. 2022. ISSN 2434-9771)

SHIMIZU, Makoto

(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

1. 動詞の強変化と弱変化¹

一部のドイツ語の教科書には、動詞の現在形を記憶する手段として「リズ

¹ 本研究は清水 (2019) (2020) (2021a) (2021b) (2021c) (2021d) (2022a) (2022b) の続編であり、科研費の助成による (ゲルマン語類型論から見たドイツ語の新しい構造記述, 基盤研究 (C) (一般), 19K00540)。カッコ内の用語は原則として英語名による。用例などで使用する言語名の略語は次のとおり。ア: アイスランド語, アル: 上部ドイツ語アルザス方言, 印欧: 印欧祖語, 英: 英語, エル: スウェーデン語エルヴダーレン方言, オ: オランダ語, ギ: ギリシャ語, ゲ: ゲルマン祖語, ゴ: ゴート語, 古英: 古英語, 古高ド: 古高ドイツ語, 古ザ: 古ザクセン語, 古ノ: 古ノルド語, ザ: (西) 低地ドイツ語北低地ザクセン方言, 初近英: 初期近代英語, ス: スウェーデン語, チュ: スイスドイツ語チューリヒ方言, 中英: 中英語, 中高ド: 中高ドイツ語, デ: デンマーク語, ド: ドイツ語, 西フ: 西フリジア語, 西ゲ: 西ゲルマン語, ニュ: ノルウェー語ニューノシユク, ル: ノルド祖語, バ: スイスドイツ語バーゼル方言, ブ: ノルウェー語ブークモール, フェ: フェーロー語, ベ: スイスドイツ語ベルン方言, メ: (東) 低地ドイツ語メクレンブルク・

ムはエストテンテン！」と記されていることがある。動詞現在形の人称語尾（ド Personalendung）をまとめた語呂合わせだが（-e/-st/-t/-en/-t/-en），厳密には人称・数屈折辞（ド Person-Numerus-Flexiv）を指す。過去形（-Ø/-st/-Ø/-en/-t/-en）を合わせれば，「エストテンテン， スッテンテン！」とでもなるだろう。

- (1) 強変化：helfen 助ける/fahren（乗り物で）行く—過去分詞
geholffen/gefahren

ド	現在	過去	現在	過去
ich	helfe/fahre	half-Ø/fuhr-Ø	wir helfen/fahren	halfen/fuhren
du	hilfst/fährst	halfst/fuhrst	ihr helft/fahrt	halfst/fahrt
er	hilft/fährt	half-Ø/fuhr-Ø	sie helfen/fahren	halfen/fuhren

ゲルマン諸語の動詞の活用には2種類ある。まず，(1)は強変化動詞（strong verb）の例で，印欧祖語にさかのぼる語幹母音の母音交替（アブラウト，ド Ablaut/(vowel) gradation）を体系化して，過去形と過去分詞を導いた不規則動詞（irregular verb）である。3基本形「不定詞—過去—過去分詞」（ド helfen—half—geholffen，fahren—fuhr—gefahren）の e [ɛ]—a [a]—o [ɔ]，ah [a:]—uh [u:]—ah [a:] がかつての母音交替にあたる。

もう1つは，英 -ed/ド -te などの歯音接尾辞（dental suffix）で過去形を作る弱変化動詞（weak verb）である。語幹は原則として無変化なので規則動詞（regular verb）だが，現在では不規則になっている動詞もある（ド denken 考える—dachte—gedacht）。過去分詞には，別の起源の形容詞派生接尾辞に由来する歯音接尾辞（英 -ed/ド -t<ゲ *-da<印欧 *-tó）を付加する。名詞や形容詞と同じく強変化・弱変化と呼ぶのは，「変化の程度が強変化では強く，弱変化では弱い」という点で共通しているためである。

フォアボマーン方言，モ：北フリジア語モーリング方言。ラ：ラテン語，ル：ルクセンブルク語

ただし、ドイツ語の(1)に対応する英 help/fare は弱変化動詞だが、古くは強変化動詞だった(古英 *helpan—healp*(複数 *hulpon*)—*holpen*, *faran—fōr*(複数 *fōron*)—*faren*)。北ゲルマン語でも、英 help の対応語はそうである(ア *hjálpa—hjálpaði—hjálpað*<古ノ *hjalpa* (*hjálp*)—*h(j)alp* (複数 *hulpum*)—*hólpinn*)。このように、後述する母音交替の規則性が薄れた結果、かつての強変化動詞から、新たに生産性を獲得した弱変化に鞍替えた例が認められる。一方、逆の発達を遂げた語も少数ながら散見される。たとえば、英 *rīng—rang—rung*「鳴る」はおそらく *sīng—sang—sung*「歌う」との類推がはたらいて(寺澤(編) 1997: 1190)、弱変化から強変化に転じたと考えられる。北ゲルマン語の対応語は、今でも弱変化のままである(ア *hringja—hringdi—hringt*, ス *ringa—ringde—ringt*)。ド *verderben—verdarb—verdorben*「だめにする」/*schmelzen—schmolz—geschmolzen*「溶かす」も同形の強変化自動詞「だめになる」/「溶ける」との類推で弱変化になった(4-2(27)の説明参照)。

以前はどうだったのだろうか。古高ドイツ語の代表的な語形と比べてみよう。

(2) 強変化: *helfan* 助ける/*faran* 行く—過去分詞 *giholfan/gifaran*

古高ド	現在	過去	現在	過去
ih	<i>hilfu-Ø/faru-Ø</i>	<i>half-Ø/fuor-Ø</i>	wir	<i>helfumēs/farumēs</i> ²
dū	<i>hilfis(t)/feris(t)</i>	<i>hulfi/fuori</i>	ir	<i>helfet/faret</i>
er	<i>hilfit/ferit</i>	<i>half-Ø/fuor-Ø</i>	sie	<i>helfant/farant</i>
				<i>hulfun/fuorun</i>

(3) 古高ド 不定詞 *helfan*: 語根 *helf-*+ 語幹形成要素 *-a-*+ 語尾 *-n*

現在 単数: er *hilfit*: *helf-*+ *-i-*+ *-t* 複数: sie *helfant*: *helf-*+ *-a-*+ *-nt*

過去 単数: er *half*: *half-*+ *-Ø-*+ *-Ø* 複数: sie *hulfun*: *hulf-*+ *-u-*(<印欧 **-Ø*) + *-n*

² 古高ド *-umēs*, *-et*, *-ant* が最古の語形だが (Braune/Eggers 1975¹³: 256 Paradigmen, Fulk 2017: 275), *-emēs*/*-amēs*, *-at*, *-ent* もある。他の語形にも異同が少なくない。

名詞などの場合と同じく、古語では、動詞は「語根+語幹形成要素（ド *stammbildendes Element*）+語尾」の3部構成であり、「語根+語幹形成要素」で語幹を形成していた。その後、かつての語幹形成要素（次例の古高ド *-i/-a-*）が摩滅し、「語幹（<語根）+語尾（<語幹形成要素+語尾）」に再分析された（現在形3人称単数/複数：ド *er hilf-t/sie helf-en* <古高ド *er hilf-i-t/sie helf-a-nt*）。古高ドイツ語の強変化動詞現在形では、語幹形成要素（幹母音 thematic vowel）は *i/a/u/e*、過去形複数ではゼロ（*u* <印欧 * \emptyset ）である。両者はどれもかつての母音交替の結果を反映している）。

なお、2人称単数現在形について改めて補足しておくと、*du*「君」に対する定動詞語尾 *-st* は、最初期の古高ドイツ語では *-s* だった（Braune/Eggers 1975¹³: 258）。ド *du hilfst/fährst*「君は助ける/(乗り物で)行く」は古高ド *dū hilfis(t)/feris(t)* にさかのぼる。現代語の *hilfst/fährst* に対応する古高ド *hilfist/ferist* は、古高ドイツ語期の中でも後期の語形に属する。

2. ウムラウトと動詞の活用

2-1. ドイツ語の *i*-ウムラウト—第1次ウムラウトと第2次ウムラウト

まず、現在形から始めよう。上記の(2)からは、(1)ド *helfen/fahren*—*hilfst/fährst*, *er hilft/fährt* の語幹母音が *e* [ɛ]—*i* [i], *ah* [a:]—*äh* [ɛ:] と交替する理由がうかがえる。ド *du fährst/er fährt* のウムラウト（ド *Umlaut/mutation*）は、正確には *i*-ウムラウト（ド *i-Umlaut*）と言い、強勢音節母音 *a* が後続音節の *i* の素性を先取りして吸収した結果である。古高ド *faran* の *-an* の *-a* は開口度が大きい中舌広（=低舌）母音で、古高ド *feris(t)/ferit* の *i* は開口度が小さい前舌狭（=高舌）母音だった。そこで、*a* が *i* の「前舌/狭（=高舌）」の素性を吸収して、短母音 *e*（=ɛ, 狭い「エ」）になったのである。部分同化（partial assimilation）として、「後続母音 *i* が先行母音 *a* に影響を与えて *ä* < *a* となった」という説明を見かけるが、影響を行使したのは強勢音節の先行母音のほうであり、後続する弱音節の母音の素性を吸収したと理解するのが適切である。ドイツ語の *i*-ウムラウトでは、*i* のほかに *ī/j* も引き金に

なった。現代ドイツ語の一部の e の表記は, ä と同じく a の i-ウムラウトに由来する。ä の表記は中高ドイツ語以降に見られるが, その後も e の表記を踏襲し続けた例もあるからである。たとえば, ド *senden/brennen* 「送る/燃やす」(ゴ *sandjan/gabrannjan*) の e は, 過去形 *sandte/brannte* と過去分詞 *gesandt/gebrannt* に見られる a が i-ウムラウトした結果である。この両語については, スウェーデン語ではそれを反映して *sända/bränna* と表記し, デンマーク語でも *sænde/brænde* とつづる。

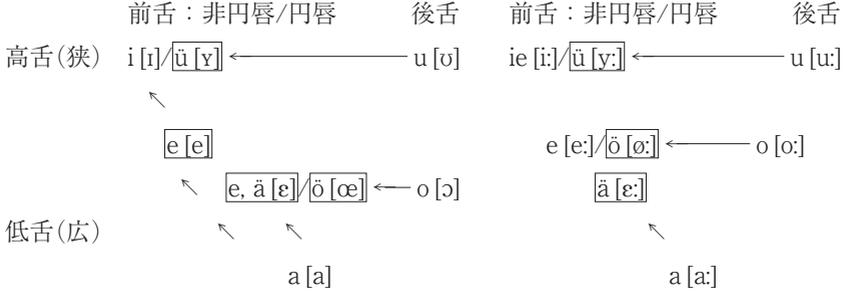
この e (中高ド ä) は 8 世紀以降の古高ドイツ語で文字表記された第 1 次ウムラウト (ド *Primärumlaut*) の例である (e < a/_i)³。名詞の複数形 (ド *Gast* 客—*Gäste* < 古高ド *gast—gesti*) や形容詞の比較変化 (ド *lang* 長い—*länger—längst* < 古高ド *lang—lengiro—lengist*) の ä (< e) も同様である。古高ド *feris(t)/ferit* の狭い短母音 e は, 初期新高ドイツ語期になって母音で終わる開音節で長母音化し, 現代語ではド *fährst/fährt* の広い ä (äh) [ɛ:] になっている。無強勢の i は中高ドイツ語期に e/ə/ に中和して弱まり, 脱落していった (中高ド *hilfest/hilfet, verst/vert*)。音韻的条件を失ったウムラウトは, 名詞の複数形など, 形態表示の手段に転用された。

短母音 a を対象とした第 1 次ウムラウトの後には, 11 世紀までの中高ドイツ語に見られる第 2 次ウムラウト (ド *Sekundärumlaut*) が続いた。条件が緩和され, 直前音節以外 (ド *väterlich* 父の < 中高ド *veterlich* < 古高ド *faterlīh*) や 「ht, hs, l/r + 子音」 (ド *mächtig* 強大な (Macht 力) < 中高ド *mehtic* < 古高ド *mahtīg*, ド *Eltern* 両親 (alt 高齢の) < 中高ド *eltern* < 古高ド *altiron*) も対象になったのである。現代語の ö [ø:] / [œ], ü [y:] / [ʏ] もこの時期に o/ö, u/ü の前舌化で誕生した (ö < o, œ < ö, ü < u, iu (ú) < ü)⁴。現代ドイツ語では, (4) に示す図式にその結果が反映されている。

³ i-ウムラウトの要因 i/ī/j は i と略記する。第 1 次ウムラウトで生まれた古高ドイツ語の狭い e と本来の広い ē は, 便宜的にともに e と表記する。

⁴ 第 2 次ウムラウトを中高ド e/ä (< a/_i) に限定し, (5) に挙げるその他の場合を「残余ウムラウト」(ド *Restumlaut*) と呼ぶこともある (Glück 2000²: 757, Bußmann 2008²: 760)。

(4) 現代ドイツ語のi-ウムラウト（第1次・第2次ウムラウト+「e-i 交替」
 (2-5 参照)）の反映



第2次ウムラウトで生まれた e~ä (=ä) は、古来の広い e (=ë) よりも開口度が広く、第1次ウムラウトによる狭い e (=e) と合わせて、中高ドイツ語には3つの「エ」があった。中高ドイツ語の母音は古高ドイツ語の16から23に増えたことになる (Paul 1989²³: 47)。(5)に示すように、これほど複雑な母音体系が中高ドイツ語から現代ドイツ語までの間に、単母音化と二重母音化を交えて再編されたのは、自然なプロセスだったと言えよう。

(5) 第2次ウムラウト（または「残余ウムラウト」）

- ① † ä [ɛ:] < 中高 † æ < 古高 † ā
- ② † ü [y] < 中高 † ü < 古高 † u
- ③ † ö [œ] < 中高 † ö < 古高 † o
- ④ † ö [ø:] < 中高 † œ < 古高 † ō
- ⑤ † äu/eu [ɔy] < 中高 † iu (=ū) < 古高 † ū
- ⑥ † ü [y:] < 中高 † ue < 古高 † uo
- ⑦ † äu/eu [ɔy] < 中高 † öu (=öü) < 古高 † ou

なお、古高ドイツ語以前に西・北ゲルマン語で起こったi-ウムラウト、たとえば、「† du *hīlfst*, er *hīlft* < 古高 † *hīlfīs(t)*, *hīlfīt* (← † *helfen*/古高 † *helfan* 助ける)」に見られる古高 † -is(t)/-it の前舌狭母音 i の影響による高

舌化 (i<e__i)⁵については、2-5 で言及する。

2-2. ウムラウトの表記をめぐる一文字と音韻変化の狭間、ß の文字

第1次ウムラウトと第2次ウムラウトの区分には問題もある。第1次ウムラウトの結果を古高ドイツ語で「*gast* 客—複数 *gesti*」と書き分けたのは、当時、すでに a と e が別の母音になっていて、a だけでは紛らわしかったためと推測される。一方、ü/ö など新しい母音もすでに誕生していたものの、i/ī/j が後続すると自動的に現れるので、u/o だけで十分だったのかもしれない。中高ドイツ語期に無強勢母音が e /ə/ に弱化して、区別がつかなくなったために、ようやく表記したとも考えられる。「第1・2次ウムラウトは同時に起きた」とみなす説もある (Hartmann 2018: 126-130)。

それと似たケースが ß 「エスツェット」の文字の導入だった。ド *zwanzig* 「20」—*dreißig* 「30」を比べると、なぜ 30 だけが *-ßig* [sɪç スイェ] で、20 と 40~90 が *-zig* [tsɪç ツイェ] なのか不思議である。これは第2次子音推移 (second consonant shift; 高地ドイツ語子音推移 High German consonant shift) の有無に起因している。この音韻変化の結果、高地ドイツ語では、閉鎖音 /t/ が母音(ド *drei-*)の直後で摩擦音 /s ʃ/ (ド *-ßig*/英 *-ty*)、それ以外(ド *zwan-* 子音の前、語頭、子音重複による長子音)で破擦音 /ts ʃ/ (ド *-zig*/英 *-ty*) になった。中高ドイツ語では *zweinzec*, *drīzec* のように z とつづったが、次第に紛らわしくなった。中高ド *ris* 「稲」/*reise* 「旅」(ド *Reis*/*Reise*, ス *ris*/*resa*) など、本来の s もあった。そこで、初期新高ドイツ語期になると、t に由来する z /s/ を sz として、筆記体の合字から ß の文字を考案し、z/(tz) /ts/ から区別したのである。現代ドイツ語の不正書法では、「長母音・二重母音 + ß [s]」以外を ss [s] とつづり、s [s]/[z] から峻別している。

音韻変化としてのウムラウトは、ä/ö/ü の文字とはあくまで別物である。たとえば、英 *twelve*/*swear*/*lion*/*five* ↔ ド *zwölf*/*schwören*/*Löwe*/*fünf* の対応は、音韻変化としてのウムラウトではなく、唇を丸める隣接子音の影響で

⁵ ドイツ語では、これが(4)の「e-i 交替」にあたる。

中高ドイツ語(zwelf/swern/lewe/vinf)以降に起こった円唇化の結果である。ド「Haus [aʊ] 家—Häuser [ɔʏ] 家々」/「Bruder [u:] 兄弟—Brüder [y:] 兄弟たち」のペアも、*äu [ɔʏ] < au [aʊ], *ü [y:] < u [u:] という音韻変化によるものではない。これは(5)⑤に挙げた中高ド *hiuser* (iu = ü) < *hūs* と(5)⑥に挙げた中高ド *brüeder* < *bruoder* という i-ウムラウトが起こった後で、(6)に示す二重母音化と単母音化を経た結果である。同じく「ド *Äuglein* [ɔʏ] 小さな目 ← *Auge* [aʊ] 目」も、(5)⑦に挙げた「中高ド *öugelin* (= öü) < *ouge*」の継承である。

(6) ① 二重母音化：中部(16世紀, 南西部・北部を除く) < 南東部(12世紀)

ド ie [ai], au [aʊ], äu/eu [ɔʏ] < 中高ド i, ü, iu (= ü)⁶

mein Haus hat Mäuse 私の家にはネズミが⁶いる < *mān hūs hāt mīuse*

② 単母音化：中部(南部を除く)

ド ie [i:], u [u:], ü [y:] < 中高ド ie, ue, üe (すべて二重母音)

liebe gute Brüder 親愛なる良き兄弟たち < *liebe guote brüeder*

2-3. ウムラウトの継承と消失—「ギョエテ」と「ゲーデ」

英語はウムラウトの文字を持たないが⁶, 歴史言語学的には i-ウムラウトを経験している。次例がその反映である。

(7) 英 *man*—*men* ↔ ド *Mann* [a]—*Männer* [ɛ]/ス *man* [a]—*män* [ɛ]

(8) 英 *mouse*—*mice* (< 古英 *mūs*—*mȳs* /y:/) ↔ ド *Maus* [aʊ]—*Mäuse* [ɔʏ]

英 *foot*—*feet* (< 古英 *fōt* /o:/—*fēt* /e:/ < */ø:/) ↔ ド *Fuß* [u:]—*Füße* [y:]

英語では、(7)のド a—ä にあたる母音が残ったのに対して、(8)のド o—ö, u—ü にあたる母音がなくなった。これはなぜだろうか。それは、後者の

⁶ 本来の二重母音もある：ド ei [ai] < 中・古高ド ei (ド *leiten* 導く < 中・古高ド *leiten*), eu [ɔʏ] < 中高ド iu (= ü) < 古高ド iu /iu/ (ド *leuchten* 光る < 中・古高ド *liuhten*)。

ö [ø:]/[œ], ü [y:]/[y] が言語類型論的に有標, つまり特殊な前舌円唇母音であることと関係がある。英語はこれを嫌って, 中英語の初期に一掃したのである。唇を丸めない日本語と違って, 一般にゲルマン諸語の前舌母音 i/e は非円唇, 後舌母音 u/o は円唇である。前舌円唇母音 ö [ø:]/[œ], ü [y:]/[y] にはいささか無理があったわけで, その消失はむしろ自然だったと言えるだろう。

(9) に示すように, ルクセンブルク語も前舌円唇母音 ö [ø:]/[œ], ü [y:]/[y] を追い出した。イディッシュ語, ペンシルヴェニドイツ語もそうである。前舌円唇母音を保つアイスランド語とフェーロー語も, (10) に示すように, 一部で非円唇化を被っている。

(9) ル Féiss [ɛi] 足(複数)/dënn [ɛ̃](=[ə]) 薄い/midd [ɪ] 疲れた

↔ ド Füße/dünn/müde

ル schéin [ɛi] 美しい/kënnen [ɛ̃](=[ə]) できる/Kïnnek [ɪ] 王

↔ ド schön/können/König

(10) ア/フ₁ fótur [ou:]/[ɔu] 足—複数: ア fætur [ai:]/フ₁ fótur [ø:] <古ノ fætr /ø:/

ア/フ₁ sonur [ɔ:]/[o:] 息子—複数: synir [ɪ:]/[i:] (<古ノ synir /y/)

↔ ド Fuß [u:]—Füße [y:] Sohn [o:]—Söhne [ø:]

さて, 明治時代の川柳に「ギョエテとは俺のことかとゲーテ言い」というのがある。Goethe [ˈgø:tə] の oe はフランス語にならった ö の古いつづりで, th は t [t] と音価が等しい。ö は o の上につけた「^e」を「[˘]」に簡略化した文字である。この方式で [ɔ:] </a:/ の後舌円唇化を表記した北ゲルマン語の å の文字が生まれた (デ gård [ʒø:ʔ] <gaard, Kierkegaard キルケゴール (哲学者))。日本語では, ö [ø:]/[œ] を前舌非円唇の「エー」/「エ」で転写する。つまり, 「エー」/「エ」という口のかまえで唇を丸めれば, ö [ø:]/[œ] となるわけである。ド Köln [kœln] 「ケルン」も同じ原理による。「オの口の形でエと発音する」などと説くドイツ語教科書が後を絶たないが, こうした無理解な説明が繰り返されるのは残念である。

ところが、1775 年以降、没するまでゲーテが暮らしたテューリンゲン地方（ド Thüringen）の古都ヴァイマル（ド Weimar）の酒場の帳簿には、Geede という記録があるという。ゲーテがそれほど有名ではなかった時代のことらしく、店員がそう聞き取ったのだらうと推測される。th (=t) [t] に代わる d [d] は「内陸ドイツ語子音弱化」（ド Binnendeutsche Konsonantenschwächung, König 1998¹²: 149）の反映である。そして、ee [e:] < ö [ø:] は前舌母音の非円唇化を示している。両者はゲーテの生まれ故郷、ヘッセン州（ド Hessen）の中心都市フランクフルト（ド Frankfurt am Main）で用いられるヘッセン方言（ド Hessisch）の特徴である（Vorberger 2022: 44-46）。ヘッセン方言は同じく前舌円唇母音が非円唇化したルクセンブルク語とともに、言語地理学的に西中部ドイツ語に属する。ゲーテの作品にはヘッセン方言とおぼしき特徴が時折、顔をのぞかせる⁷。上記の逸話が真実たとしたら、もしかしたらゲーテ自身も「ゲーデ」と名乗っていたのかもしれない。「ゲーデ（Geede）とは俺のことだとゲーテ言い」というわけである。

2-4. ゲルマン諸語の i-ウムラウト, u-ウムラウト, a-ウムラウト

ウムラウトはゲルマン語内部の個別的発達であり、言語ごとに異なる。ドイツ語の第 1 次ウムラウトは、早期にスカンジナビア南部の故地を離れたゴート語を除く古ゲルマン諸語に共通である。一方、第 2 次ウムラウトはドイツ語圏北西部（ド Osnabrück オスナブリュク）から起り、南部の上部

⁷ たとえば、『ファウスト第 1 部』（ド *Faust. Der Tragödie erster Teil*）の下記 2 例に見られるド -eige(n)~eiche(n) は韻を踏んでいる。したがって、-eige(n) は標準ドイツ語の [aɪçə(n)] ではなく、ヘッセン方言的な [aɪçə(n)]（現在では [aɪfə(n)] に近い）の発音を反映していることになる（Vorberger 2022: 45）：ド Ach **neige**. / Du Schmerzen**reiche**. / Dein Antlitz gnädig meiner Not! 「ああ、どうかお向けください / 痛みに満ちたマリアさま / おなたのお顔をお恵み深く私の苦しみへと」（*Faust I* 3587-3589）；Wie alles sich zum Ganzen webt. / Eins in dem andern wirkt und lebt! / Wie Himmelskräfte auf und nieder **steigen** / Und sich die goldnen Eimer **reichen**! 「万物が重なり合って総体を織りなし / それぞれ互いの内に活動し、生を営んでいることか / 天の諸力が上昇し、下降しつつ / 黄金のつるべを渡し合っていることか」（*Faust I* 447-450）

ドイツ語地域 (ド Innsbruck インズブルク) には十分に達しなかった。ド *nützen/nutzen* 「役立つ」、*drücken* 「押す」/*drucken* 「印刷する」の併存はその反映である。

オランダ語は第2次ウムラウトを経ておらず、長母音と二重母音のウムラウトが欠けている (オ *kaas* [a:] チーズ/*horen* [o:] 聞く ↔ ド *Käse* [ɛ:]/*hören* [ø:] < 古高ド *kāsi*/古ザ *hōrian*)。語形変化でもウムラウトはそれほど多くない (オ *gast* [a] 客—複数 *gasten* [a] ↔ ド *Gast* [a]—*Gäste* [ɛ], オ *ik vaar*—*hij vaart* ↔ ド *ich fahre*—*er fährt*)。ä/ö/ü の文字も使わないが、発音はある。オランダ語の u [y], u/uu [y:] の発音はドイツ語の ü [y]/[y:] の前舌円唇狭母音に対応する (オ *dun* [y] 薄い ↔ ド *dünn* [y] < 古高ド *thunni*)。オランダ語の長母音 ū が 1150~1200 年頃に、ゲルマン諸語として例外的に無条件に \bar{y} に口蓋化 (硬口蓋化) した原因は不明である (オ *muur* [my:r] 壁/*nu* [ny:] 今 ↔ ラ *mūrus*/ド *nun* [nu:n], Van Loon 2014²: 216)。オ *kunst* [y] (または [ʌ]) 芸術 ↔ ド *Kunst* [ʊ]) のように、短母音 u も中期オランダ語以降、口蓋化 (または低舌化) した語形が標準オランダ語には多く見られる (Van Loon 2014²: 213-219)。なお、オ *eu* [ø:] はド *ö* [œ]/[ø:] の発音にあたるが、個々の音韻変化の結果を反映して、語例での対応はさまざまである (オ *vleugel* 翼/*reus* 巨人/*veulen* 子馬 ↔ ド *Flügel* [y:]/*Riese* [i:]/*Fohlen* [o:])。

さて、これまでに取り上げたウムラウトは、後続音節の i/i:j を伴う「i-ウムラウト」だった。ゲルマン諸語には、後続音節の母音によるものとして、ほかにも「a-ウムラウト」(ド a-Umlaut), 「u-ウムラウト」(ド u-Umlaut) が認められる。

北ゲルマン語はウムラウトが豊富で、「u-ウムラウト」による後舌母音の交替 (古ノ φ / ω / < 古ノ *a/___u) がユニークである。13世紀初頭には円唇化 (ö/œ < 古ノ φ / ω) を起こした。今でもアイスランド語には ö < a の交替が豊富に見られる (ア *barn* 子供—複数 *börn* [œ] < 古ノ *bǫrn* / ω / < 古ノ **barnu*)。「Anna アンナ (女名)—主格以外 *Önnu* [œ]) のように、母音 u が保たれている例もある。無強勢母音にも及んでおり、たとえば、ア *gamall* 「古い (男性単数主格) に対する女性形 *gömul* (< 古ノ *gǫmul* < **gampl* < **gamalu* は、無

強勢母音の -mul < *mōl < *mal/_u に作用した後で、-mul の u が強勢母音の gö- < *ga- となる「二重 u-ウムラウト」(ド doppelter u-Umlaut) を誘発した結果である (Zafuska-Strömberg 1982: 46, Nedoma 2010³: 41f.)。長母音の a-ウムラウト (古ノ ô/ɔ:/ < /ル *â/_u) も起こったが⁵, 13 世紀に古ノ á/a:/ と古ノ ô/ɔ:/ に合流し, 一般に古ノ á と表記したので (古ノ mālum < mālum ~ mōlum, mál 「言語」の複数属格), 現代語では識別できない (Haugen 2013: 38)。一方, 現代の大陸北ゲルマン語では, u-ウムラウトの痕跡はきわめて乏しい。代表例は「デ barn 子供—複数 børn [œ]」である。西ゲルマン語では, u-ウムラウトによる前舌母音の交替 (i < e/_u) が見られ, 「ド ich helfe 私は助ける < 中高ド hilfe < 古高ド hilfū (← helfan)」の変化はその一例である (2-5 参照)。

a-ウムラウトも西・北ゲルマン語に共通だが, 後舌母音 (o < u/_a, ド Horn/ア horn < ゲ *urnan) に比べて, 前舌母音 (e < i/_a) の例はドイツ語では少数にとどまる (「ア neðan 下から < /ル *niðan」↔ 「ド geritten < 古高ド giritan (← ド reiten/古高ド ritan 馬で行く)」。) 。なお, ドイツ語史では伝統的に a-ウムラウトを「割れ」(ド Brechung) と称することがある (Gerdes/Spellerberg 1986⁶: 29f.)。

(11) u-ウムラウト (左図) と a-ウムラウト (右図)



北ゲルマン語では, i-ウムラウトがドイツ語より早い時期に起った。そのため, 「古高ド gast 客—複数: gesti」↔ 「古ノ gestr (< /ル *gastiR) —複数: gestir (< /ル *gastiR)」の対比が物語るように, 長語幹 (-VCC) の語を中心

に単数形の古ノ *gestr* も i-ウムラウトを経ている。ただし、500~700 年頃の語中音消失 (syncope) で短母音と無強勢母音が脱落したので、古ノ *gestr* では i-ウムラウトを引き起こした母音 *i* が不在である。その代わり、アイスランド語では *gestur* のように後代の母音挿入 (anaptyxis/svarabhakti) によって、-u- の母音が生まれた。一方、古高ド *gast* (<ゲ **zastiz*) は *i* の脱落后に i-ウムラウトしたので、*a* のままである。このように、古高ドイツ語で音韻規則だった i-ウムラウトは、音韻的条件が失われた古ノルド語では、すでに形態規則になっていたと言える (Haugen 2013: 36)。

一般に西ゲルマン語の歴史区分では、およその目安として、無強勢母音があいまい母音 *e* [ə] に弱化する以前を「古」、弱化後を「中」、それが脱落する時期を「新」とする。一方、北ゲルマン語では、古期以降に無強勢母音の弱化も見られる(デ *kalder/dømmer/tunger* 呼ぶ(現在形)/舌(複数形)/判断する(現在形)—ス *kallar/tungor/dömer*—ア *kallar/tungur/dæmir* <古ノ *kallar/tungur/dømir*)。しかし、巨視的に言語史を通観すると、弱音節はすでに古期以前に脱落していたのであり、西ゲルマン語の歴史区分とは別の事情が背後にあると言える。

2-5. 動詞の活用とウムラウトの反映

次に、動詞の活用とウムラウトの関係を検討しよう。ド *du hilfst, er hilft* (← *helfen* 助ける) は、古高ド *hīlfis(t), hīlfit* の -is(t)/-it に見られる前舌狭母音 *i* の影響による高舌化 (*i* < *e*__*i*) の結果である。この「e-i 交替」(ド *e-i Wechsel*) は、古高ドイツ語以前に起こった「西ゲルマン語 i-ウムラウト」(ド *westgermanischer i-Umlaut*, Schweikle 2002⁵: 87) による。2-2 で確認したように、音韻変化としてのウムラウトは、ä/ö/ü という特殊文字に限らない。ちなみに、短母音が *a/i/u* の 3 母音組織であるゴート語 (ゴ *hīlpan* <ゲ **xelpanan*) では、*i* < *e* という変化は無条件に起こった(ド *mīten*/ス *mītt* 中央の(ゴ *midjis*) ↔ ラ *medius*; ド *ist*/英 *is* (ゴ *ist*) ↔ ギ *estí* (*éotí*))。

一方、古高ド *ih hilfu* (← *helfan*) の *i* は、後舌狭母音 *u* の影響による u-ウムラウト (*i* < *e*__*u*) である。2-4 で扱った北ゲルマン語の u-ウムラウト (q

/ɔ/<a/_u) とは、前舌母音の交替に対して後舌母音の交替という相異はあるが、高舌化という点で共通している。今でも上部ドイツ語では i のままだが ((14)③ *ich hilf*e<中高ド *hilf*e<古高ド *hilf*u), 標準ドイツ語では複数形 (ド *wir helf*en) との類推によって, *ich helf*e のように e を示している。古高ド *dū hilf*is(t) の i は命令形 (ド/古高ド *hilf!*) にも侵入した (Tiesema 1969²: 23, 40; Krahe/Meid 1969^b: 113)。一方, ド *ich fahr*e (<古高ド *faru*) の a が無変化なのは, 広母音 a が後舌狭母音 u の調音位置から遠すぎたことによる。命令形も ド *fahr*(e)! (<古高ド *far!*) であり, 2 人称単数形 (ド *fähr*st<古高ド *feris*(t)) の ä (<e) は侵入していない。

- (12) ① ド *helf*en 助ける (<古高ド *helf*an)—*half*—*gehol*fen (<古高ド *giholf*an)
 ゴ *hılpan*—*halp* (複数 *hulpan*)—*hulpan*s (-s は男性単数主格語尾)
- ② ド *bınd*en 結ぶ (<古高ド *bınt*an)—*band*—*gebund*en (<古高ド *gibunt*an)
 ゴ *bıntan*—*bant* (複数 *buntun*)—*buntans*
- (13) ド *werf*en 投げる (<古高ド *wer*fan)—*warf*—*geworf*en (<古高ド *giworf*an (o<u/_a))
 ゴ *wairpan* /ε/ (á /ε/<i/_r)—*warp* (複数 *wurpan*)—*wairpan*s
 /ɔ/ (á /ɔ/<u/_r)

過去分詞について見てみよう。(12)①ド *gehol*fen<古高ド *giholf*an の o は u が a-ウムラウトした結果である (旧称「割れ」(ド Brechung))。中舌広母音 a の影響を受けて, 先行音節の後舌狭母音 u が o に低舌化 (o<u/_a) を起こした。上述の i-ウムラウト (i<e__i) と同じく, 2-4 の最後で述べたように, 西ゲルマン語と北ゲルマン語に共通している。東ゲルマン語のゴート語では, (12)① *hulpan*s のように u のままである。

一方, (12)②ド *gebund*en<古高ド *gibunt*an では, a の直前にもかかわら

ず u が現れる。「n+子音」の鼻音結合 (ド Nasalverbindung) では、上顎に当たった舌の位置が下がらず、狭母音 u にとどまったのである。ド *binden* < 古高ド *bintan* (<ゲ **bendanan*) の語幹母音 i は、同じ理由、すなわち「i < e/_n+子音」という変化を経て「古高ド i < ゲ *e」となった結果である。

それでは、不定詞について検討しよう。(12)①ド *helfen* (<古高ド *helfan*) とゴ *hīlpan* の語幹母音 i と e の違いは、なぜ生じたのだろうか。上述の高舌化 (i < e/_i/u) を思い出していただきたい。2-5の冒頭で言及したように、ゴート語では古高ドイツ語と違って、i/u がなくても i < e となった (Krahe/Meid 1969^a: 57)。ゲルマン祖語は「ゲ *a < 印欧 *o」という音韻変化を経たために、o「オ」を欠く a「ア」/i「イ」/u「ウ」/e「エ」の4母音組織だった。これはいかにも不安定であり、a/i/u/e/o か a/i/u なら安定する。低舌化 (o < u/_a) で o が復活した他の古語と違って、ゴート語は無条件の高舌化 (i < e) によって、短母音を a/i/u の3母音組織に変革したのである。(13) のゴ *wairpan* /ɛ/ (ai/ɛ/<i/_r) の ai/ɛ/「エ」とゴ *wairpans* /ɔ/ (au/ɔ/<u/_r) の au/ɔ/「オ」は、h/hv (=hw)/r による低舌化 (ǎi/ɛ/, au/ɔ/ < i/u/_h/hv/r) を受けた i「イ」/u「ウ」の異音にすぎない。

他のゲルマン諸語ではどうだろうか。(14)に挙げる例をもとに検討しよう。まず、①アイスランド語では i-ウムラウトに加えて、u-ウムラウトに続く円唇化 (ア ö < 古ノ q < ル *a/_u) も起こっている。②古英語は i-ウムラウトに加えて統一複数 (ド Einheitsplural) を示す。なお、統一複数は以下の例にも共通している。③スイスドイツ語チューリヒ方言の *hällfe*「助ける」は単数がすべてかつての i/u-ウムラウトを保つ i < ä だが、*faare*「(乗り物で)行く」では変わらない。ウムラウトが稀な④オランダ語では、語幹母音が同一である。北フリジア語モーリング方言では、短母音化 (â [ɔ] < ââ [ɔ:]) と低舌化 (a < i) が起こっている。⑥西フリジア語では、「割れ」(西フ *brekking*, jo [jɔ] < ea [ɪə]) によるくんだり二重母音 (falling diphthong) といわゆるのほり二重母音 (rising diphthong) の交替が観察される (清水 1994: 482f., 2006: 31)。

- (14) ① ア *fara* 行く : ég *fer* (<ル *-u) þú *ferð* (<古ノ *ferr* (+ þú 君) <ル *-iR)
 hann *fer* (<古ノ *ferr* <ル *-iR) við *förum* (<古ノ *förum* <ル *-umR)
 þið *farið* (<ル *-id) þeir *fara* (<ル *-an(n))
- ② 古英 *helpan* 助ける : ic *helpe* þū *hīlp*(e)st hē *hīlp*(e)t
 wē/ġe/hīe *helpaþ*
faran 行く : ic *fare* þū *fær*(e)st hē *fær*(e)þ
 wē/ġe/hīe *farap*
- ③ 𐀀 *hālfte* 助ける : ich *hālfte* du *hālfst* er *hālfte* {mir/ir/si}
hālfte
faare (乗り物で)行く : ich *faare* du *faarsch* er *faart*
 {mir/ir/si} *faared*
- ④ オ *helpen* 助ける : ik *help* jij *helpt* hij *helpt* {wij/jullie/zij}
helpen
varen [a:] (船で) 行く : ik *vaar* [a:] {jij/hij} *vaart* [a:]
 {wij/jullie/zij} *varen* [a:]
- ⑤ モ *fāāre* [ɔ:] 行く : ik *fāār* [ɔ:] dū *fārst* [ɔ:] hi *fārt* [ɔ:]
 {we/jam/ja} *fāāre* [ɔ:]
schrīwe 書く : ik *schrīw* dū *schrāfst* hi *schrāft*
 {we/jam/ja} *schrīwe*
- ⑥ 西フ *fleane* [ɪə] 飛ぶ : ik {fljoch [jo]/*flean* [ɪə]} (do) fljochst [jo]
 hy fljocht [jo] {wy/jimme/hja} *fleane* [ɪə]

後続音節の母音が先行音節の母音に近づく順行同化 (progressive assimilation) としての母音調和 (vowel harmony) に対して、ウムラウトは逆行同化 (regressive assimilation) と言われることがある。ただし、カッコ内の下線部のように、ウムラウトは同一音節内の同化の場合もある (ド er *kiest* 彼は選ぶ <中高ド er *kiuset* <古高ド er *kisūt* (u < o / __i) (← *kiosan* (o < u / __a)

選ぶ<西ゲ **kiusan* (i<e/u__)<ゲ **keusanan*)。また、母音ではなく、子音を誘発要因とする「r-/w-ウムラウト」もある(ド r-/w-Umlaut, 古ノ *gler* ↔ 古高ド *glas* ガラス, 古ノ *syngja* /y/(<ノル **singwan*) ↔ 古高ド *singan* 歌う)。母音交替との以上の相違点には注意が必要である (Schweikle 2002⁵: 105-112, Nedoma 2010³: 36-43)。

以上、これまでに紹介した代表的な音韻変化をまとめると、次表のようになる。

- (15) ① i-ウムラウト (前舌化 [円唇化]): e-i 交替, 第1次ウムラウト (e/ā<a/_i (=i/i/j), 古高ドイツ語, [第2次ウムラウト] (それ以外, 中高ドイツ語)
- ② i-ウムラウト (高舌化): i<e/_i (西・北ゲルマン語; ゴート語は無条件で高舌化)
- ③ u-ウムラウト (高舌化): i<e/_u (西ゲルマン語)
- ④ u-ウムラウト (高舌化): ö<ø /ɔ/<a/_u (北ゲルマン語)
- ⑤ a-ウムラウト (低舌化): o<u/_a (西・北ゲルマン語)
- ⑥ a-ウムラウト (低舌化): e<i/_a (西・北ゲルマン語)
- ⑦ 鼻音結合 (高舌化): i<e/_n + 子音 (古ゲルマン諸語)
- ⑧ h/hv (=hw)/r による低舌化: {ai /ε/, aú /ɔ/} < {i, u} /__ {h/hv/r} (ゴート語)

3. 人称語尾—統一複数, 統一単数, 統一語尾

3-1. 2人称過去単数と東・西低地ドイツ語の統一複数語尾

ここで、再び語尾の話題に移ろう。(2)に示した古高ドイツ語の2人称単数 *dū hilfis(t)/feris(t)* の語尾は -s(t) だが³, その語末音 -(t) は本来の語尾 -s に前接化した2人称代名詞単数主格形 *dū* 「君」のなごりである。一方、過去形は古高ド *dū hulfi/fuori* (↔ ド *du fuhrst/halfst*) となり、語幹も語尾もカッコ内の現代ドイツ語とは大きく異なる。これは接続法過去 (=II式) と同形

で、西ゲルマン語の特徴である (↔ゴ *halpt/fört*, 古ノ *h(j)alpt/fört*)⁸。相手に対する婉曲表現とみなす説もあるが、正確な理由は不明である⁹。第2次ウムラウトを経た中高ド *du hilfe/vüere* に引き継がれたが、(24) (25)で述べる弱変化動詞 *-s(t)* との類推によって失われた。

現代ドイツ語の現在形3人称複数形は、ド *sie helfen/fahren* のように語尾 *-en* を伴うが、古高ド *{sie/sio/siu} helfant/farant* では、さらに *-t* を伴う語尾 *-ant* だった。この語末音 *-t* は、ラ *iuvant/ワ ils aident* 「彼(女)らは助ける」(←ラ *iuväre/ワ aider*) と語源的に共通である。

この *-t* の脱落が低地ドイツ語を東西に大別する鍵になる。「北海ゲルマン語的特徴」の一環で統一複数形を示す低地ドイツ語では、古ザクセン語にさかのぼる西低地ドイツ語(北低地ザクセン方言)は複数形のすべての人称で語尾 *-et* であるのに対して、東方植民で拡張した東低地ドイツ語(メクレンブルク・フォーアポマーン方言)は語尾 *-en* となる。

(16) ド *wir helfen—ihr helft—sie hlfen* (英 *{we/you/they} help*)

ザ *{wi/ji/se} helpt* ↔ メ *{wi/ji/sei} helpen* (←ド *helfen/ザ・メ helpen*)

古ザクセン語本来の現在形複数語尾の推定形は、1人称 **-am* / 2人称 **-id*, **-id* / 3人称 **-anþ* と再建される。「北海ゲルマン語的特徴」で無声摩擦音 *-þ/θ/* の直前の *n* が脱落し、3人称が「古ザ *-ad* < **-anþ*」となって、同じく有声摩擦音 *-ð/ð/* で終わる2人称との類推から1人称 **-am* が駆逐され、*-ad* に統一された。これが西低地ドイツ語(ザ)の語尾 *-et* の由来である。一方、東低地ドイツ語(メ)の *-en* は後代の発達である。ハンザ同盟の盟主リュベック(ド Lübeck)の書き言葉が1350年頃に接続法と過去現在動詞(=話法の助動詞)の語尾 *-en* との類推やオランダ語の影響で、語尾 *-en* となり、1400

⁸ 厳密には、古高ド「アオリスト語幹 + *-i*」↔ゴ/古ノ「完了形語幹 + *-t*」である。

⁹ 古高ド *wir helfumēs* (1. (2))も接続法現在(=I式) *wir helfēm* の侵入であり、早期に *wir helfēm* (>ド *wir helfen*)となった (Gerdes/Spellerberg 1986⁵: 52)。

年頃までに普及した。ちなみに、オランダ語では摩擦音の直前の n は保たれ、3 人称 -ant の -t が脱落し (-en<-ant), 1 人称 -en との類推で 2 人称 -et が駆逐されて、統一複数 の -en [ə(n)] になっている (オ {wij/jullie/zij} *helpen*)。

統一複数 はドイツ語圏南西部のスイスドイツ語チューリヒ方言 (-ed) とアルザス方言 (-e) にも見られる。ただし、同じスイスドイツ語でも、ベルン方言は異なっており、語末音 -n の脱落以外は標準ドイツ語に準じた分布を示す。

- (17) ド wir *helfen* ↔ ihr *helft* ↔ sie *helfen* {私たちは/君たちは/彼(女)らは} 助ける (← *helfen* 助ける, 訳語は以下同様)
 アル {mér/éhr/sé} *hâlfe* (← *hâlfe*) チュ {mir/ir/si} *hâlfed* (← *hâlffe*)
 ベ mir *hâlfte* ↔ dihr *hâlfet* ↔ si *hâlfte* (← *hâlfte*)

3-2. スウェーデン語エルヴダーレン方言の統一単数語尾

これとは逆に、統一単数 (ド Einheitssingular) を示すユニークな例が、大陸北ゲルマン語として例外的に古風な形態的特徴を豊富に保つスウェーデン語エルヴダーレン方言 (ス älvdalska/エル övdalsk) である。強変化動詞 *baita* 「噛む」の単数は、現在形 1 人称および過去形 1・3 人称を一般化したゼロ語尾に統一されている。弱変化動詞 *mōla* 「描く」の単数は「現在 -r ↔ 過去 -ð」の対立である (Åkerberg 2012: 254, 271f.)。アイスランド語 (*bíta/mála*), フェーロー語 (*bíta/mála*) との活用と比較してみよう。フェーロー語では統一複数 が支配的であり、(直説法) 過去形には人称変化による区別がなく、「単数 ↔ 複数」の対立になっている。

	強変化：現在		過去		弱変化：現在		過去	
	単数	複数	単数	複数	単数	複数	単数	複数
1 人称	<i>bait</i>	<i>baitum</i>	<i>biet</i>	<i>bietum</i>	<i>mōler</i>	<i>mōlum</i>	<i>mōleð</i>	<i>mōleðum</i>
2 人称	<i>bait</i>	<i>baitið</i>	<i>biet</i>	<i>bietið</i>	<i>mōler</i>	<i>mōlið</i>	<i>mōleð</i>	<i>mōleðið</i>
3 人称	<i>bait</i>	<i>baita</i>	<i>biet</i>	<i>bietu</i>	<i>mōler</i>	<i>mōla</i>	<i>mōleð</i>	<i>mōleð</i>

(19) ア	単数	複数	単数	複数	単数	複数	単数	複数
1 人称	bít	bítum	beit	bitum	mála	málum	málaði	máluðum (<古ノ málaða)
2 人称	bítur	bítið	beist	bituð	málar	málið	málðir	máluðuð (<古ノ bítr) (<古ノ beizt, z = ts)
3 人称	bítur	bíta	beit	bitu	málar	mála	málaði	máluðu (<古ノ bítr : 2 人称単数の転用, Ranke/Hofmann 1988 ⁵ : 66)

(20) フ	単数	複数	単数	複数	単数	複数	単数	複数
1 人称	bít	bíta	beit	bitu	máli	mála	málaði	málaðu
2 人称	bítur	bíta	beistst	bitu	málar	mála	málaði	málaðu
3 人称	bítur	bíta	beit	bitu	málar	mála	málaði	málaðu

- (21) エル ① Jasso. {*Ø Mqlum/Ø Mqlið*} i dag. あっそう。|私たち/君たち (Ø)| は今日 (i dag), 絵を描くのですね (Mqlum/Mqlið)
- ② Au! {*Mqlum wið/Mqlið Ø*} i dag? えっ! |私たち (wið)/君たち (Ø←[V-ið +] ið)| は今日, 絵を描くのですか
- ③ Um *Ø kumum* i kwelld, rindşer ig að ið. 今晚 (i kwelld), 私たちが (Ø) うかがう (kumum ← kumo 来る) 場合には (um), 私は (ig) 君たちに (að ið) 電話します (rindşer)
Um *Ø kumið* i kwelld, ir ig iema. 今晚, 君たちが (Ø) 来る (kumið) 場合には (um), 私は (ig) 家に (iema) います (ir)
- ④ {*Ø Kumum/Ø Kumið*} te werd wáter, innq {*Ø kumum/Ø kumið*} iem. |私たち/君たち (Ø)| は家に (iem) 着く (kumum/kumið) 前に (innq) 濡れてしまう (werd wáter) ことになる (kumum/kumið te←kumo + te- 不定詞 「~することになる」
(Åkerberg 2012: 302-305 変更)

定動詞複数で人称語尾を区別するエルヴダーレン方言は、強調・対比する

場合を除いて、代名詞主語 *wið* 「私たち」/*ið* 「君たち」を「*wið/ið*+定動詞」の語順で省略する。(21)①の空主語 (-Ø) は、強調・対比する場合は *wið/ið* で補う。両者は話題省略 (topic drop) のようではあるが、③および④の後半は従属文での省略である点に注意を要する。②の「定動詞+*wið/ið*」の語順では *wið* は現れるが、定動詞語尾 *-(i)ð* と重複する *ið* は重音省略 (haplology) を受ける (Åkerberg 2012: 253, 302-307)。

3-3. 大陸北ゲルマン語 4 言語の統一語尾とその周辺

一方、大陸北ゲルマン語の 4 言語の語尾は、人称・数の区別なくすべて 1 種類である。

(22) 不定詞	現在	過去
ス bita 噛む/ <i>mála</i> 描く	biter/ <i>málar</i>	bet/ <i>málade</i>
デ bide/male	bider/maler	bet/malede, malte
ブ bite/male	biter/maler	bet, beit/malte
ニ bita/ <i>mála</i>	bit/ <i>málar</i>	beit/ <i>mála</i>

現在形に注目すると、ニューノシュクの強変化動詞 *bit-Ø* は 1 人称単数形 (Ⅰ *bait-Ø*/フエ・ア *bít-Ø*<古ノ *bít-Ø*<ル **-u*) の踏襲だが、その他はすべて *-r* で終わっている。この *-r* はロータシズム (*-r*<ル **-R*<ゲ **-z/z*/*<*印欧 **-s*) を経ており、ドイツ語の本来の 2 人称単数語尾 *-s* (ド *-st*<古高ド *-s*[<ゲ **-z(i)/-s(i)*] + 古高ド *dū*) に対応する。(19)の変化表に記したように、古ノルド語の 3 人称単数 *bitr* (>ア *bitur*) の語尾 *-r* は、2 人称単数の語尾 (ル **-i-R*<ゲ **-i-z(i)/-i-s(i)*) の侵入による。ド *er hilft*<古高ド *hilfít* に似て、ノルド祖語の 3 人称単数は **-i-đ* (<ゲ **-i-d(i)/-i-p(i)*) で終わっていた (Ranke/Hofmann 1988⁵: 66, Haugen 1982: 122, Krahe/Meid 1969^{7b}: 98)。2 人称単数 (ア *pú bitur*<古ノ *bitr*<ル **-i-R*<ゲ **-i-z(i)/-i-s(i)*) の語尾が現在形すべてに一般化したのである。

ここで思い出されるのが、英語の「3 単現」の *-(e)s* (英 *he bites*) である。

英語の直説法現在の語尾は、およそ次の変遷を遂げた(宇賀治 2000: 209-217)。

- (23) 古英： 単数 1 人称 -e/2 人称 -est/3 人称 **-eþ** 複数 -aþ(統一語尾)
 中英南部方言： 単数 -e/-e)st/**-eþ** 複数 -eþ
 中部方言： 単数 -e/-est, (-es)/**-es, -eþ** 複数 -es, -e(n)
 北部方言： 単数 (-e)/-es/**-es** 複数 -es, -is
 初近英(1600 頃)：単数 -∅/(thou) -est, (ye/you) -∅/**-eth, -s** 複数 -∅

「3 単現」で語尾が残ったのは「英語史最大の謎」(朝尾 2019: 62) と言われ、語尾 -(e)s の起源には「定説がない」(中尾 1972: 159) とされている。古英語の -eþ/θ/と -(e)s は発音が似ており、-s<-þ の置換が起こっても自然な印象を覚える。ただし、中英語北部方言では語尾 -es が活用形を広く覆っていた。ヴァイキングの侵攻で古ノルド語の影響を受けた北部方言の語形が進出したとしたら、古ノルド語の 2 人称単数語尾 -r と縁があるかもしれない。あくまで短絡は禁物だが、諸説ある中で、1 つの可能性に挙げられる余地も否定できない。

4. 弱変化動詞

4-1. 弱変化動詞過去形と歯音接尾辞の起源

ここで弱変化動詞に話題を転じてみよう。その過去形(英 -ed/ド -te)と過去分詞(英 -ed/ド -t)の目印は歯音接尾辞だが⁹、起源は異なる。過去分詞の歯音接尾辞は、印欧語の形容詞派生接尾辞(印欧 *-tó ラ dictus 言われた<dicō 私は言う)に由来する¹⁰。一方、印欧祖語とは異なって、ゲルマン祖語が過去形に利用したのは、動詞で最も中立的な語形である過去分詞中性単数形にド tun/英 do 「する」の古い過去形(ド tat/英 did)を添えた形式

¹⁰ この語形は次のカッコ内の音韻変化を反映している(ド -t [第 2 次子音推移<]/英 -ed<ゲ *-da/ða/[ヴェアナーの法則]<ゲ *-pa/θa/[第 1 次子音推移<]/印欧 *-tó)。

だったと推定されている。たとえば, *Go salbōn* 「香油を塗る」の過去形 *salbōda/salbōdēdun* 「彼(女)は/彼(女)らは香油を塗った」の起源は, おそらく *Ge *salbōd [ad] [ed]a/*salbōd [ad]ēdun* < **salbōda dēda/*salbōda dēdun* 「香油を塗られた (**salbōda* 過去分詞) ようにした (**dēda/*dēdun*, *Do tat/taten*)」に求められることになる。ゲルマン祖語は動詞文末型 (OV) の言語だったと考えられており, *Ge *salbō-da* の **-da* (<印欧 **-tó*) は **-de-/*-dē-* の前で重音省略を被った。これは, 低地ドイツ語や上部ドイツ語の「不定詞+*Do tun*」による *tun*-迂言形 (*tun-periphrasis*, *Do er tat salben = salbte*) や英語の「*did*+不定詞」(*he did annoint = annointed*) に似ている (Speyer 2007: 81)。オランダ語の方言では, *ik horendet* (=オ *ik horen deed* (*Do ich hören tat*/英 *I hear did*) =オ *ik hoorde* (*Do ich hörte*/英 *I heard*)) 「私は聞いた」とも言うようである (Tiesema 1969²: 58)。つまり, この形式は完了形 (英 *have*+過去分詞/*Do* 過去分詞+*haben/sein*) に先立つ「ゲルマン語最古の迂言形」だったのである。

4-2. 派生動詞としての弱変化動詞とその種類

ドイツ語弱変化動詞の現在形と過去形の人称変化は, (24)のとおりである。一方, 古高ドイツ語には(25)の3種類があった¹¹。古高ドイツ語には異形が散見されるが, 代表的な語形を次に示す。

(24) 弱変化動詞: *Do zählen* 数える—過去分詞 *gezählt*

現在	過去	現在	過去
<i>ich zähle</i>	<i>zählte-Ø</i>	<i>wir zählen</i>	<i>zählten (-n←-en)</i>
<i>du zählst</i>	<i>zähltest</i>	<i>ihr zählt</i>	<i>zähltet</i>
<i>er zählt</i>	<i>zählte-Ø</i>	<i>sie zählen</i>	<i>zählten (-n←-en)</i>

¹¹ (25) 古高 *Do* ① *jan*-動詞 (*Ge *i/j*<印欧 **i/ej*) はラテン語の第4変化動詞 (ラ *custōdīre* 見張る), ② *ōn*-動詞 (*Ge *ō*<印欧 **ā*) は第1変化動詞 (ラ *plantāre* 植える), ③ *ēn*-動詞 (*Ge *ē*<印欧 **ē*) は第2変化動詞 (ラ *tacēre* 黙る) にあたる (Vogel 2012: 67)。

- (25) 古高ドイツ ① jan-動詞：zellen←語根 zal- + 複合語幹形成要素
 (= 接尾辞 + 幹母音)Ø/i(<*j+a) + 語尾 -n
 ② òn-動詞：salbòn←salb- + ò + -n
 ③ èn-動詞：habèn←hab- + è + -n

① jan-動詞：zellen 数える—過去分詞 *gizalt, gizelit* (> ド *zählen—gezählt*)

	現在	過去		現在	過去
ih	<i>zellu</i>	<i>zalta, zelita</i>		wir <i>zellemēs</i>	<i>zaltum, zelitum</i>
dū	<i>zelis(t)</i>	<i>zaltōs(t), zelitōs(t)</i>		ir <i>zellet</i>	<i>zaltut, zelitut</i>
er	<i>zelit</i>	<i>zalta, zelita</i>		sie <i>zellent</i>	<i>zaltun, zelitun</i>

② òn-動詞：salbòn 香油を塗る—過去分詞 *gisalbōt* (> ド *salben—gesalbt*)

	現在	過去		現在	過去
ih	<i>salbōm</i>	<i>salbōta</i>		wir <i>salbōmēs</i>	<i>salbōtum</i>
dū	<i>salbōs(t)</i>	<i>salbōtōs(t)</i>		ir <i>salbōt</i>	<i>salbōtut</i>
er	<i>salbōt</i>	<i>salbōta</i>		sie <i>salbōnt</i>	<i>salbōtun</i>

③ èn-動詞：habèn 持っている—過去分詞 *gihabēt* (> ド *haben—gehabt*)

	現在	過去		現在	過去
ih	<i>habēm</i>	<i>habēta</i>		wir <i>habēmēs</i>	<i>habētum</i>
dū	<i>habēs(t)</i>	<i>habētōs(t)</i>		ir <i>habēt</i>	<i>habētut</i>
er	<i>habēt</i>	<i>habēta</i>		sie <i>habēnt</i>	<i>habētun</i>

目印は zal-/salb-/hab- に続く ① ja/② ò/③ è である。今でも語幹が -d/-t で終わる弱変化動詞は、ドイツ語の教科書では「発音しにくいので e を入れる」と説いているが、現代語として共時的に見ても、適切な説明とは言えない。その証拠に、ドイツ語 *Warte nur, balde!* 「待てしばし」(Goethe: *Wandrer's Nachtlied*) では、発音しやすいのに e がついている。**Wart nur!* とは言わない。これは

③ *en*-動詞: 古高ド *wartēn* の *ē* の残存である(古高ド *er wartēt; warte* (<*-ē*)!). 古高ド ① *zeli!*/② *salbo!* も同様である。一方、強変化動詞: ド *du hältst/er hält* (← *halten* 保つ) では、*e* は不在である。中高ド *du heltest/er heltet* の *e* (<古高ド *i*) は、*i*-ウムラウトによってかつての前舌狭母音の素性を先行する強勢音節の母音に吸収されて、脱落した。*i*-ウムラウトと無縁のド *ihr haltet* (<中・古高ド *ir haltet*) では *e* が現れる。歴史言語学に照らすと、現代語の例外的現象だけでなく、共時的な説明の矛盾が解消されることがある。

弱変化動詞は形容詞弱変化と同じく、ゲルマン語の革新だった。歯音接尾辞の付加で規則的に多数の過去形を作る印欧語は、ほかにはない。しかも、強変化から転じた少数例を除いて、弱変化動詞はすべて派生動詞である。古くから基本動詞をカバーしていた強変化動詞に対して、弱変化動詞は必要に迫られて現れたらしい。動詞はむやみに増産できず、借用も稀である。たとえば、オランダ語の基本動詞 *prijzen* [ɛi] 「ほめる」(過去 *prees* [e:]—過分 *geprezen* [e:]) は、ド *preisen*—*pries*—*gepriesen* と同じく強変化だが、名詞 *prijs* 「価格」(ド *Preis*) から品詞転換 (conversion) によって派生した *prijzen* 「価格をつける」(過去 *prijdsde*—過分 *geprijsd*) は弱変化である (ド *auspreisen* 同左—*preiste*~*aus*—*ausgepreist*)。

弱変化動詞の派生には接尾辞が必要だった。英 *to phone* 「電話する」<*phone* 「電話」、ド *frühstücken* 「朝食を取る」<*Frühstück* 「朝食」のようなダイレクトな品詞転換は無理だったのである。例外もあるが、派生接尾辞には特定の意味役割があり、およそ次のように分類される。

(26) ① *jan*-動詞 (>古高ド *-en*):

(i) 使役動詞 (causative) 「~させる」<動詞

古高ド *trenken* 飲ませる<*trinkan* 飲む (ゴ *dragkjan*
<*drigkan*, ド *tränken*<*trinken*)

(ii) 強意・反復動詞 (intensive-iterative) 「強く・繰り返し~する」
<動詞

古高ド (in)*snizzen* 彫刻する<*snidan* 切る, 刻む

(^ド schnitzen < schneiden)

- (iii) 作為動詞 (factitive) 「～のようにする」<形容詞

古高^ド heilen 治す < heil 無傷の (ゴ hail^{jan} < hails, ^ド heilen < heil)

- ② ^{ōn}-動詞

- (i) 装備・結果動詞 (ornative-resultative) 「～の装備・結果をもたらす」
<名詞

古高^ド salb^{ōn} 香油を塗る < salba (^ド salben < Salbe)

古高^ド fisk^{ōn} 魚を捕る < fisk 魚 (^ド fischen < Fisch)

- (ii) 強意動詞 (intensive) 「強く～する」<動詞

古高^ド kor^{ōn} 試す < kiosan 選ぶ (^ド küren < kiesen)

- ③ ^{ēn}-動詞

- (i) 起動動詞 (inchoative) 「～し始める」<形容詞

古高^ド fül^{ēn} 腐る < fül 腐った (^ド faulen < faul)

- (ii) 継続動詞 (durative) 「～し続ける」<動詞

古高^ド darb^{ēn} 困窮する < durfan 必要とする (^ド darben < (be-)dürfen)

最も語数が多いグループは① ^{jan}-動詞であり、*j/i/の影響による i-ウムラウトを伴う¹²。(27)(i)のスウェーデン語の ä/ö とデンマーク語の æ/ø は、対応するドイツ語の e が a の i-ウムラウトにさかのぼることを示している (2-1 の説明参照)。^{-jan} の付加による派生のベース (「<」で示す) になったのは、(i) 使役動詞では強変化動詞の過去形単数、(ii) 強意・反復動詞では過去形複数・過去分詞 (ゼロ階梯が起源の i/u) の語幹母音だった。これは母音交替の階梯を示し、過去の意味とは無関係である。

¹² ^ド nähren 「養う」—genesen 「治る」 (ゴ nas^{jan} 治す—(g)alnisan) では、ロータリズムによる r—s の交替の痕跡が見られる。これはヴェアナーの法則 (Verner's law) に従って ^{-jan} に強勢があった時期に起こり、^{jan}-動詞による派生が語頭アクセントに固定するゲルマン祖語後期以前にさかのぼることを示唆している (Tiesema 1969²: 64)。

- (27) ド (i) *setzen* すわらせる (ス *sätta*/デ *sætte*) < 過去形単数 *saß* ← *sitzen* すわっている (古高ド *sezzen* < *saz* ← *sizzan*, 古ノ *setja* < *sat* ← *sitja*, ゴ *satjan* < *sat* ← *sitan*)
legen 横たえる (ス *lägga*/デ *lægge*) < *lag* (ス *låg*/デ *lå* < 古ノ *lá* /a:/) ← *liegen* 横になっている
führen 導く (ス *föra*/デ *føre*) < *fuhr* (ス/デ *for*) ← *fahren* (乗り物で) 行く
- (ii) *schnitzen* 彫刻する < 過去形複数 *schnitten*/過去分詞 *geschnitten* ← *schneiden* 刻む
bücken おじぎをする < [ゴ *bugum*/*bugans*] < ド *biegen* 曲げる

強変化自動詞から派生した同形の弱変化 *jan*-動詞の他動詞もある (ド *erschrecken* 驚く (強変化 *erschrak*—*erschroken*) ↔ 驚かせる (弱変化 *erschrekte*—*erschreckt*)。一方、弱変化 *jan*-動詞の他動詞が類推で強変化になった例もある (ド *verderben*—*verdarb*—*verdorben* だめになる, だめにする; *schmelzen*—*schmolz* (< 中高ド *smalz*¹³)—*geschmolzen* 溶かす, 溶かす)。ド *verderbt* 「墮落した」(過去分詞), 英 *melt*—*melted*—*melted* (s-を欠く語形) は弱変化のままである。この両者は本来の強変化動詞 (ド *brechen* 割る ↔ 割れる) とは背景が異なる。

これ以外にも、ゴート語を中心に接尾辞 *-na* による④ *nan*-動詞もある。このグループは、自動詞の起動動詞「～し始める」または中動態動詞を派生した(例: ゴ *fullnan* 満ちる < *fulls* 満ちた), ア *vakna* 目覚める, *sofna* 寝入る)。

4-3. 弱変化動詞のウムラウトと代償延長

① *jan*-動詞に引き続き注目しよう。古高ド *zellan* 「数える」(ド *zählen* < ゲ **taljanan*) は *zala* 「数」(ド *Zahl* < ゲ **talan*) からの派生である。古語ドイツ語では, **jan* の **j* は古ノ・ア *telja* と違って摩滅したが¹⁴, *i*-ウムラウト

¹³ o < a の変化は過去分詞 *geschmolzen* の語幹母音 o との類推による。

(e<a/___)に加えて, *jの前でll<*lという「西ゲルマン語子音重複」(West Germanic consonant gemination)を被った¹⁵。後続のゲ *-an-もこの*jの影響を受けて, 古高ド -enに高舌化した。古高ド *sezzen* (ド *setzen* 置く<ゲ **satjanan*)でも同様である。

過去形は古高ド *ih zelīta/zalta*「私は数えた」となる。ゲ *janの*j/i/に由来するiとi-ウムラウトによるeを示す*zelita*に対して,i-ウムラウトが起こった時期よりも早期にiが脱落したのが*zalta*である¹⁶。今では*zählte*(<古高ド *zelīta*)に統一されているが, 早期にi(<*j)が脱落したアイスランド語は*taldi*(←*telja*)である。一方, ド *senden*「送付する, 放送する(=電波を送る)」(ス *sända*/ゴ *sandjan*)は, *sendete*「放送した」/*sandte*「送付した」を区別する。ド *wenden*「向きを変える」(ス *vända*/ゴ *wandjan*)の過去形 *wendete/wandte* という異形態も同様の理由による。ドイツ語では, iの脱落は長音節語幹(VCC-, $\bar{V}C$ -)を持つ語の過去形と形容詞語尾を伴う過去分詞で起こった。ド *Gesandte*「使節」/*Verwandte*「親戚」は, i-ウムラウトを欠く過去分詞 *gesandt/verwandt* の名詞化から誕生した弱変化名詞である。

①jan-動詞のド *denken*「考える」(ゴ *þankjan*)—*dachte*—*gedacht*では, ス *tänka*—*tänkte*—*tänkt*/デ *tænke*—*tænkte*—*tænkt*に対して, nk—ch[x]—ch[x]の交替が不規則である。これは閉鎖音が連続して発音しにくい-nkt-の-kt-を異化(dissimilation)によって-cht-[xt]として, -nch-の連続が生じた結果, nが脱落したことによる。「n+摩擦音」のnは一般に落ちやすい傾向がある。「北海ゲルマン語的特徴」による英 *five* [ai]/西7 *fiif* [i:]「5」(二重母音/長母音)では, ド *fünf* [yn]の「短母音+n」を「二重母音/長母音+∅」

¹⁴ 古ノルド語で-jaのjが保たれたのは, 名詞の場合(古ノ *hirðar* 羊飼いの(複数主格)↔ *niðjar* 子孫, 親族(複数主格))と同じく, 短語幹で後舌母音 a/oの直前に限られる(Krahe/Meid 1969^b: 121)。

¹⁵ (25)①の現在形2/3人称単数: 古高ド *dū zelis(t)/er zelit*は, 西ゲルマン語子音重複が起こる以前にjがi(古高ド -is(t)/-it)の前で脱落したので, 単子音のlを示す(Krahe/Meid 1969^b: 121)。

¹⁶ 古くは誤って「逆ウムラウト」(ド *Rückumlaut*, a<e)が起こったと解釈していた。

として、母音の長さで補っている。古ゲルマン諸語は短母音と短子音を最小単位の1モーラ (mora) とし、その数に神経質な「モーラ言語」 (mora language) だった。長母音・二重母音、長子音・二重子音はそれぞれ2モーラと数えたのである。1モーラ減ると、「代償延長」 (compensatory lengthening) で *āh* < *anh* として不均衡をカバーし、古高ド *denken*—*dāhta*—*gidāht* (ゴ *bankjan*—*þāhta*—*þāhts*) とした。その後、モーラ言語の性格は薄れて、ド *denken*—*dachte* [a]—*gedacht* [a] になった。

5. 1 人称語尾をめぐって—英 I am/ド ich bin の由来

ここで、(25)の古高ドイツ語弱変化動詞の活用表を改めてよく見てみよう。① jan-動詞：ih *zellu* (←*zellen* 数える) では、現在形1人称単数が強変化動詞 ih *hilfu*/*faru* (←*helfan*/*faran* 助ける/行く) と同じ -u で終わっている。ところが、② *ōn*-動詞と③ *ēn*-動詞では、ih *salbōm*/*habēm* (←*salbōn*/*habēn* 香油を塗る/持っている) のように、-m が現れている。これ以外にも、(28) に示すように、語幹形成要素を欠く少数の「語根動詞」 (root-verb) でもそうだった。不定詞に注目すると、ド *sein* 「～である」/*tun* 「する」 (←古・中高ド *sīn*/*tuon*) が現代語の対応例であり、不定詞の目印は -en ではなく、-n である。このように、かつての語根 *sei*/*tu*- に直接 -n がつき、語幹形成要素に由来する -e- を欠いている。ド *gehen* 「行く」/*stehen* 「立っている」も古高ド *gēn*/*stēn* (*gān*/*stān*) にさかのぼる語根動詞に由来し、不定詞語尾 -en は後代の類推による。

- (28) ド ich |*bin*//*tue*/*gehe*/*stehe*|←*sein*/*tun*//*gehen*/*stehen*
 <古高ド ih |*bi*m, *bi*n/*tuom*, *tuon*/*gēm*, *gēn*/*stēm*, *stēn*;
 ←*sīn*/*tuon*/*gēn*/*stēn*

古高ドイツ語では、この4つの語根動詞の現在形1人称単数も -m で終わっていた。中高ドイツ語にかけて -n に弱化し、ド ich *bin* 「私は～です」

はそのなごりである。古くは、② *ön*-動詞と③ *ën*-動詞以外の強・弱変化動詞でも、現在形1人称単数語尾は *-m* だったが、後に脱落した。つまり、本来、*ド ich {helfe/fahre/zähle/habe}* の *-e [ə]* は語尾ではなく、語幹形成要素だったのである。

オランダ語や西フリジア語では、その *-e [ə]* も残っていない。不定詞はオ *-en [ə(n)]*/西フ *-e [ə]* (↔ *ド -en [ən]*) で終わるので、1単音分さらに減ったのである。

(29) *ド ich {helfe/fahre/zähle/habe}* ← 不定詞 *helfen/fahren/zählen/haben*
(*-en [ən]*)

オ *ik {help-Ø/vaar-Ø/tel-Ø/heb-Ø}* ← *helpen/varen/tellen/hebben* (*-en [ə(n)]*)

西フ *ik {help-Ø/far-Ø/tel-Ø/ha(w)-Ø}* ← *helpe/farre/telle/hawwe* (*-e [ə]*)

ここで、フランスの哲学者デカルトの名言、ラ *Cogitō ergō sum*. 「我思う、故に我あり」のサンプル訳を検討しよう。

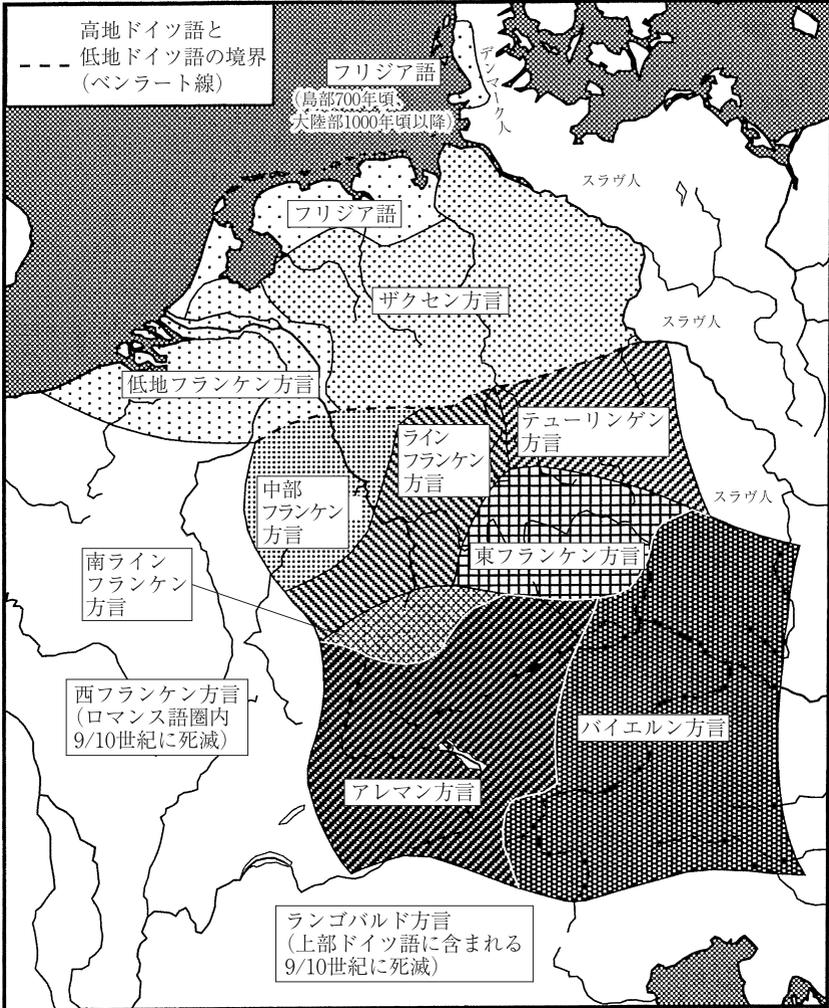
(30) 英 *I think-Ø, therefore I am.* *ド Ich denke, also bin ich.*

オ *Ik denk-Ø, dus ik ben.* ル *Ech mengen, dofir sinn ech.*

歴史言語学的に見ると、英 *I think, therefore I am.* の *am* の *-m* は、ラ *sum* (ギ *eimí (éimí)*) の語尾 *-m* (ギ *-mí (-mí)*) に対応する。1. で言及した強変化動詞 (*ド helfen/fahren* < 古高 *ド helfan/faran*) の現在形1人称単数 (*ド ich helf-e/fahr-e* < 古高 *ド ih hilf-u-Ø/far-u-Ø*) は、本来、ゼロ語尾 (古高 *ド -Ø*) であり、「*ド -e* < 古高 *ド -u*」は語幹形成要素 (ゲ **-ō* < 印欧 **-ō*) だった。*ド ich denke* の語尾 *-e* も同様である。一方、語幹形成要素を欠く語根動詞は、1人称単数語尾 (ゲ **-m* < 印欧 **-mi*) を伴っていた。英語の *I am* は、このかつての1人称単数語尾を伝える現代ゲルマン語で唯一の例なのである。*ド Ich denke, also bin ich.* の *bin* (< 古高 *ド bim*) の *-n* は、*-m* の弱化に

よる。その本来の1人称単数語尾 -n (ル ech *sinn* 我あり) を語尾 -en (ル ech *mengen* 我思う) として他の動詞にも一般化したのが、ルクセンブルク語である。

1人称複数の語尾は、(25)古高ド ① *zelle***mēs**/② *salbō***mēs**/③ *habē***mēs** の -mēs であり、本来、「1人称 -m+複数 -ēs」という複合に由来する。1人称の目印 -m は、ド *mich*, *mir*/英 *me* (ラ 対格 *mē*/与格 *mihi*) と起源が同じで、ド *ich*/英 *I* (ラ *egō*) は後代の発達による二次的な語形である。ドイツ語の2人称単数語尾 -st (*du denkst*) も、「語尾 -s+2人称代名詞 *du*」の融合に由来する。このように、言語変化においても「歴史は繰り返す」と言えることがある。



図表1 東フランク王国期前後の言語状況
(Meineke/Schwerdt (2003: 209) をもとに一部変更して作成)

ドイツ語から見たゲルマン語 (9)



図表2 旧ドイツ語圏、オランダ語、フリジア語群の方言 (スラヴ語派のソルブ語を除く) (Barbour/Stevenson (1990: 76) をもとに作成)

参考文献

- Åkerberg, Bengt (2012) *Älvdalsk grammatik*. (under medverkan av Gunnar Nyström). Ulum Dalska.
- 朝尾幸次郎 (2019) 『英語の歴史から考える英文法の「なぜ」』大修館書店
- Barbour, Stephen/Stevenson, Patrick (1990) *Variation in German*. Cambridge et al: Cambridge University Press.
- Braune, Wilhelm/Eggers, Hans (1975¹³) *Althochdeutsche Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Bußmann, Hadumod (2008⁴) *Lexikon der Sprachwissenschaft*. Stuttgart: Kröner.
- Donaldson, B. C. (1983) *Dutch. A Linguistic History of Holland and Belgium*. Leiden: Nijhoff.
- Fulk, R. D. (2018) *A Comparative Grammar of the Early Germanic Languages*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Gerdes, Udo/Spellerberg, Gerhard (1986⁶) *Althochdeutsch — Mittelhochdeutsch*. Frankfurt am Main: Athenäum.
- Glück, Helmut (Hrsg.) (2000²) *Metzler Lexikon Sprache*. Stuttgart/Weimar: Metzler.
- Hartmann, Stefan (2018) *Deutsche Sprachgeschichte*. Tübingen: Francke.
- Haugen, Einar 1982 *Scandinavian Language Structures*. Tübingen: Niemeyer.
- Haugen, Odd Einar (2013) *Norröne Grammatik im Überblick*. (Aus dem Norwegischen von Astrid van Nahl). Hamburg: Buske.
- König, Werner (1998¹²) *dtv-Atlas Deutsche Sprache*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag.
- Krahe, Hans/Meid, Wolfgang (1969⁷a) *Germanische Sprachwissenschaft I. Einleitung und Lautlehre*. Berlin: De Gruyter.
- Krahe, Hans/Meid, Wolfgang (1969⁷b) *Germanische Sprachwissenschaft II*. Berlin: De Gruyter.
- Meineke, Eckhard/Schwerdt, Judith (2001) *Einführung in das Althochdeutsche*. Paderborn/München/Wien/Zürich: Schöningh.
- 中尾俊夫 (1972) 『英語学大系 9 英語史 II』大修館書店
- Nedoma, Robert (2010³) *Kleine Grammatik des Altisländischen*. Heidelberg: Winter.
- Paul, Hermann (2002¹⁰) *Deutsches Wörterbuch*. Tübingen: Niemeyer.
- Ranke, Friedrich/Hofmann, Dietrich (1988⁵) *Altnordisches Elementarbuch*. Berlin/New York: De Gruyter.
- Schweikle, Günther (2002⁵) *Germanisch-deutsche Sprachgeschichte im Überblick*. Suttgart/

Weimar: Metzler.

- 清水 誠(1994)「北フリジア語モーリング方言の音韻」千石 喬 / 川島淳夫 / 新田春夫(編)『ドイツ語学研究 2』クロノス 445-503.
- 清水 誠 (2006)『西フリジア語文法—現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』北海道大学出版会
- 清水 誠 (2019a)「ドイツ語から見たゲルマン語一名詞の性、格の階層と文法関係」『北海道大学文学研究院紀要』158. 37-76.
- 清水 誠 (2020)「ドイツ語から見たゲルマン語 (2)—属格と所有表現」『北海道大学文学研究院紀要』160. 37-96.
- 清水 誠 (2021a)「ドイツ語から見たゲルマン語 (3)—名詞の性の発達と複数形の形成」『北海道大学文学研究院紀要』162. 35-101.
- 清水 誠 (2021b)「ドイツ語から見たゲルマン語 (4)—冠詞と指示詞」『北海道大学文学研究院紀要』163. 1-22.
- 清水 誠 (2021c)「ドイツ語から見たゲルマン語 (5)—一人称代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』164. 19-41.
- 清水 誠 (2021d)「ドイツ語から見たゲルマン語 (6)—3人称代名詞, 再帰代名詞, 所有代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』165. 31-60.
- 清水 誠 (2022a)「ドイツ語から見たゲルマン語 (7)—2人称代名詞と関連表現」『北海道大学文学研究院紀要』166. 1-27.
- 清水 誠 (2022b)「ドイツ語から見たゲルマン語 (8)—不定詞と分詞」『北海道大学文学研究院紀要』167. 1-30.
- Speyer, Augustin (2007) *Germanische Sprachen. Ein historischer Vergleich*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- 寺澤芳雄 (編) (1997)『英語語源辞典』研究社
- Tiesema, H. D. (1969²) *Abriss der historischen Laut- und Formenlehre des Deutschen*. Vaassen: Uitgeverij Van Walraven.
- 宇賀治正朋 (2000)『現代の英語学シリーズ 第8巻 英語史』開拓社
- Van Loon, Jozef (2014²) *Historische fonologie van het Nederlands*. Schoten: Universitas.
- Vogel, Petra (2012) *Sprachgeschichte*. Heidelberg: Winter.
- Vorberger, Lars (2022) *Hessisch*. Berlin: Dudenverlag.
- Zaluska-Strömberg, Apolonia (1982) *Grammatik des Altländischen*. Hamburg: Buske.